

郷土室だより

第 66 号

平成 2 年 1 月 31 日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 543-9025

埋もれた記録

4

安藤 菊 二

八丁堀が、江戸時代に与力・同心の拝領地であったことは、衆知の事実でありながら、さてその日常生活ということになると、詳しいことはとんとわからない。ところが、幸なことに、町奉行佐久間健叟の三男で、母方の与力原氏の姓を継いで町与力となった原胤昭氏が、晩年に『江戸時代文化』という雑誌に年余にわたって書かれた、「八丁堀与力の生活」という、一連の文章があつて教えられるところが多い。

与力というのは、馬に乗って合戦に出る格式の武家で、将校級である。江戸時代になって、一人の町奉行の配下に、与力二十五騎、属僚として百三十人の同心が配属されることになって、南北両奉行配下に、五十騎の与力と二百六十人の同心が附属していた。この人々がみな八丁堀に屋敷を拝領して住んでいたのである。与力の持高は地方二百石、三百坪から五百坪の土地を拝領、同心は五・六十坪から百坪くらいを拝領していた。

それに盆暮には出入屋敷から附届があつたから、生活は豊であった。胤昭翁の記しておられる与力の生活は、われわれとは段違いに水準が高く、それに旧慣を墨守して、古来の武家年中行事を正確に守り伝えていたように見える。いずこも同じ正月風景ながら、与力の家の正月はまた格別に折目正しい。二回ほどに回を分けて、原氏の文章を紹介しておきたい。(資料は「江戸時代文化」第二巻一号、昭和三年一月発行、による)



江戸の正月 清長画

△その9▽ 八丁堀のお正月(1)

原 胤昭

正月

△江戸町方与力の年中行事▽

何か江戸の話をお聞かせようとおっしゃる高木さんの御懇望にほだされ、一番覚えていたのは、ついこの春、ようとお約束したのは、

私は常に出獄人を保護する、はなはだことの多い社会事業を手にもち、かしておやじ独りポッチでやっていますので、

(与力同心の組織・家柄など省略)
年中行事といっても、与力五十軒ごとく同一ではない。家々に式例がある。前にも申したとおり、家柄がれつきとしていた伊豆の伊東系だ、鎌倉の大宅系だ、三浦だ千葉だ新田だと、旧格家例によって特色があって、なかなかやかましかった。ここには、与力としての旧家であった千葉系、私の養家原、三浦系、私の実家佐久間などを中心とってはなします。

門飾り お話はまず元旦の夜明けから始まります。門飾は旧年内、師走の二十八日に建てる。表門は冠木門(かぶきもん)である。門の柱から三・四尺前を少し掘って、三寸角の荒木柱二本を建て、上手に穴を穿り、中貫をわたし、木戸門の形に造る。柱に添えて左右へ黒松と笹葉のついた竹とを結びつける。

また同じ笹の竹を葉を左右に出し、中で根本を合せ、横の貫へ結つけ、飾り門の形を造る。この飾り松は、領分である知行所の百姓から、年々吉例として送って来た。飾った門柱の根本へは、奇麗な太い松薪を幾本も立てて丸く巻き、太い藁縄で化粧結びをする。ぐるりの地面へ銀砂、清洗した川砂を蒔いて盛る。

注連かさざり 六尺長の藁飾を、上の横貫へ結びつける。中真(心)の下げ藁を左右へ別け、そこへ、うらじろ、ゆずりは、板昆布をはさむ。その上へ、だいたい、海老、福包を結びつける。福包は小奉紙二枚を外皮として、中へ、かや、かちぐり、ほんだわら、白米ひと掴みを三四寸径の鞠形にし、紅白の水引の端を揃え、ちぢらして飾る。福包へ入れるものはまだあるのだが、失念した。

この乾海老は、毎年例として、新場の魚問屋「さぶ」奥三郎兵衛より歳暮の贈物に呉れた。七尾をきれいな青竹の魚かごに盛れてあった。新場の魚川岸は、新場橋西の材木町河岸である。

玄関前の飾り すべて元朝は箒を使わないのを吉例とした。だから大晦日は深更まで屋敷内の掃除だ。掃除する下僕や出入の諸職人たちは、高張り大提灯を諸所に建て、手に手に弓張り提灯を持ち奔走する。それはそれは勇ましい賑やかなものであった。

ゆえに元旦の玄関先には、塵ひとつなく清められている。正面玄関の左右柱前へ棹を建て、三・四尺の根松を結びつけ、四・五尺大の軒飾を鴨居に打つ。下げ藁の間々へうらじろ、ゆずりは、切り紙四手五・六枚をさす。

室内のメ飾り 大小の輪飾を懸ける。うらじろ、ゆずりは、切り紙四手をさす。飾る所は室内ごとくである。仏壇から居間・部屋・納戸、どこからどこまでも、一区画をなしている室は残りなくだ。土蔵・物置・台所・湯殿・大小雪隠まで、すこぶる奇異の体ありだが、台所にも荒神あり、湯焚き場にも火の神あり、便所にも雪隠の神様ありと信じていた余音がなあったろう。

鏡餅 大形白木の三方台に載せる。

餅は円形にとる、おそなえ餅である。そうして厚く仕立てたのし餅三枚を菱形に切り、お供えの上へ重ねて飾る。菱餅の上へは、ゆずりは、うらじろを敷き、板昆布を垂れ下げ、それへ橙海老福包をのせ飾る。お供え餅は大小数十個を造り、白木の三方台、或はお供え盆へ白紙を三角に折敷き、うらじろ・ゆずりはを敷き、その上にお供え餅をのせる。神棚の神々、荒神棚、仏壇に並べた諸仏体へ供える。

歳神棚 これを恵方棚という。玄関の天井へ特設する。恵方は年毎に方向を変えるものなれば、一定の位置に祭壇をおき難く、ゆえに白木の棚板を備えおき、当年の恵方に向け、玄関の天井より釣り下げ、歳神棚を造り、五寸径のお供餅と一对の神酒を供える。

以上の行事は、元旦の暁前にごとく設備するもの。これ皆主婦指導の下に家族婢僕の奔走するものなれば、皆徹夜して新朝を迎えるようになる。子供や若い者は、お正月が来るので嬉しくって寝られない。のみならず、ことに彼らを寝かさなない、こんな伝説があった。「大晦日に眠ると、歳の神様が怒って、すぐ年をよらせて、元日からおぢいさん、おばあさんにされてしまう」と。

もう一つ大晦日に眠れないことが

あった。それはまたこういう伝説であ
る。三が日(元日二日三日)のうちに
禁止詞がある。第一がねずみ。第二が
なべ。第三が箒。この名詞を口にだす
と、その年は運が悪い。病難災難何か
厄難が降り来たる、と。もしこの三つ
のひとつについて、必要上発言せねば
ならないときは、鼠はおふく、鍋はお
くろ、箒をおなげと代えていうのだ。

ところがこの日は年越しだ。元日だ。
なかなか事の多い時だ。誰かが、必要
上放心して、この忌み詞をいってしま
う。そうすると、それいった。誰がい
った彼がいったと家内中の大笑にな
って賑う。……

元旦、切り火 新調の火打ち箱を携
え、若党神棚前に座り、火打ち鎌火打
ち石にて打ち合い、切り火を出し、ほ
くちに移し、硫黄につけた角形の附木
に燃し付け、神前に供えた油皿に浸し
たとうすみに点じ、灯明を神前に供う。

諸神棚、仏壇に同じく。
主人は未明に寝所を出で、入浴結髪、
礼装を整え表座敷に座す。

服装 主人、射斗目、麻上下。夫人、
かいどり、模様。子供男、紋付麻上下。
女、ふりそで、模様。

若水 表座敷に家族の着座、やや定
まるころ、若党勝手元より手桶にいれ
た水を持出し、つぎに塗盆へ手水柄杓、

白木曲もの製の底浅の柄杓と新しい手
拭をたたみて添え、縁先へ据える。若
党「おめでとうございます。若水を召
しませ。」と一同へ挨拶して下る。若水
とはこの年初めて汲みあげた新しい水
である。大晦日の夜中に、元旦の勝手
用水はことごとく汲み溜めて、井戸側
を洗い清めておく。

元朝には飯焚下男、若水を汲む当役
である。まづ井戸側の椽へ塩をつまみ
を打ちて井戸神様を三拝し、前に積ん
だ塩をつまんで、井戸の内外周囲にま
いて井戸を清める。立会役は若党であ
る。汲みあげた水、すなわちこの年始
めて汲んだ水を新しい手桶にいれる。

これが若水である。主人若水を使い手
を浄め、拭いて席に着く。ついで、夫
人その他家族順次に若水を使い浄む。
主人は洗手ただちに神仏祖先の祭壇
を拝し、祝の席に着く、ここで一同祝
の詞を交換して、喜びの挨拶をする。

おとっさんおめでとう。おっかさ
んおめでとうといった。おとうさん、お
かあさんといわなかった。にいさん、
ねえさんといった。おにいさん、おね
えさんとはいわなかった。

△その10▽ 八丁堀のお正月(2)

原 胤昭

雑煮の祝 膳部の器具から話まし
う。

膳 ちようあしの木膳、外部墨塗、
内部朱塗、正面両側のふちへ金時
絵、家の紋所。

おやわん 黒塗内朱塗、わん並にふ
たへ金紋。

汁わん ひら椀、つぼ椀も同じ黒塗
金紋。

たかつき 外黒塗、ひら朱塗、台へ
金紋。

生ま酢皿 瀬戸物。
柳箸 柳の白木、太い丸ばし。箸袋、
小奉書紙を一寸五分巾に畳み裾を
折る。折紙より紅白水引を膝折に
結ぶ。箸は万一にも折れては不吉
なりとて太いそげなきを選む。箸
袋の表へは、旦那様、奥様、家族

には、おいと様、弥三郎様などと
用る人の名を書く。これは給仕の
用意なるにより敬称を添う。柳箸
は正月中の祝膳には幾度も使う。
雑煮の盛りつけ おやわんに二片づ
つ盛る。なまぐさ、といって生酢皿へ
ゴマメ二尾頭のついた格好の良きを選
む。高つきへ沢庵漬大根二片。雑煮餅
は中々大きなきれで、三寸に二寸ほど
の角。四分五分くらい厚さ。二片を
椀へ盛ると蓋は盛りあがる。



豊国画 祭午初

のだ。

雑煮の仕立て方 味噌汁、仙台味噌を用いて仕立る。脇き菜は、里芋、小松菜、焼豆腐、いずれも湯煮をしておく。餅は釜に湧しおき、もちぎるに盛り、ゆでて引揚げ、水分のしぼれたとき味噌汁に入れ、一寸煮て脇菜とともに椀に盛る。はながつおは、小さな蓋重に入れ、菜箸を添える。

屠蘇の祝 雑煮の祝すみて後、給仕の二婢、床の間の前に進み、違い棚より卸して、一婢は銚子を、一婢は盃と喰つみの重ね重箱を並べた広蓋盆をはこんで、主人の正面に供し、三つ組の盃を台のまま差出し進め、重詰の肴を取って供す。主人三献の祝盃をあげ、次席の主婦へ、それより席順に盃をあげ。

喰つみ重箱 に盛る肴は、てりごまめ、昆布巻き、長芋、蒲鉾、玉子焼を一重、黒煮豆一重、数の子一重。器具は屠蘇道具と申し、一家伝来の品有り、金蒔絵、内梨子地塗、今でならは立派な美術工芸品。私は毎年お正月の仕度をする時母が話したのを覚えてる。

これだけはお先祖様から伝つてる品なので、天保のお趣意の時にも、こわさないでしまえたのだと。屠蘇の銚子へは、つるの前へ小さな根松と藪こらじ、実のついたのを、折のし形に白紙

をたたみ根を結ぶ。紅白の水引にて飾りつける。

主人の初出 元日の祝の膳すみし頃、中働きの家婢進み来て、供廻りの仕度整いたることを告ぐ。主人は会釈して玄関に向い、奉行所へ参礼す。夫人をはじめ子女弟妹皆立って玄関に送り出でて坐す。

浄めの切り火 玄関敷台を離るる頃中働きの家婢、用意している火打ち鎌と火打ち石を携えて中央に膝を屈め、主人の背後より、カチカチカチと三度に火を打つ。送り出た一同は辞義す。

供廻り 若党 大小刀を差し、背割羽織、たつつけ袴。紺足袋。鞋。

御用箱持ち・草履取り・鎗持ち・挟箱かつぎ。各下男一人。紺かんばん、あさぎ股引。

召使う男どもを、下男と呼んだ。仲間と呼び、僕といわなかった。

私どもの家は南の組で、奉行所のある数寄屋橋まで、ちゃらちゃらと雪駄の音高く歩いて行くには、だいぶ時間がかかるので、八丁堀の自宅出門は、夜明け、東天の白む頃、しかも陰暦で一ヶ月後れている。今の二月の初めという極く寒い時だ。当今よりももっとからっ風が吹いたようだ。けれども家庭の万事万端が、清浄と新鮮に満され

新年の気分をつやしく感じました。

おかえり 主人は奉行への年礼をすませて帰宅する。門に近づくと草履取りの下男、駆け抜けて門に入る。家の奥まで聞えるほどの大音声にて、おかえり、と呼ぶ。これは一と声にて呼ぶを例とす。下男の一芸として、声自慢をしたものだ。この声を聞けば、家族は前のごとく、玄関の一と間に居並びて迎礼す。

元日の昼飯 祝膳には白飯味噌汁、なます。大根にんじんのきざみ。さいたまゴマメの三杯ず。おひらへおせちを盛る。おせちのしめは、蒲鉾、きざみするめ、こんにやく、焼豆腐、ごぼう、にんじん、しい茸、香物。浅漬大根。

主人の神参り 氏神である山王権現、今も茅場町にある日枝神社、次に墓提所に参じ祖先を拝す。供廻り若党下男。元日の夕飯 普通のとおおり。

正月の記事は、まだたんとあります。あまり頁を埋めるとわるいでしょうから、記事のすくない月のところ埋めましょう。(以上、二巻一号)

八丁堀の初午

太鼓売り 廿日正月も過ぎた。羽子板の音もうすらぎ、凧のうなりも遠く離れた。陰暦の二月近くなると、寒い

寒い。真昼間だって往來の水も解けはしない。びゅうびゅうと北風が吹く。

こけら屋根のうすっぱらな板を煽るから、風の響はなお凄く聞こえる。しかも江戸の花と唱われた火事の一歩多い季節だ。なには無しに人の心は緊張している。ちょうどその時分になると往來に売りに来るのが、太鼓小太鼓を天秤棒の両端に幾つも結びつけて昇いでいる太鼓の行商だ。見苦しくもない木綿綿入れの尻っぱしより、浅黄や千草色のだぶだぶした股引をはいて、大きい小さい太鼓の音を響かして売り歩く。ずいぶん幾たりも来た。それだけ太鼓の売れるほど、江戸には稲荷がたくさんあったのだ。北風の寒いところ、火事の多いところで、新しい皮の太鼓鋭いばちの音響に誘われ、初午気分を引き起された。この太鼓売りは、あの浅草山谷辺に住んで製造を業としていた人々である。

稲荷の社 与力の邸内にはことごとく勧請してあった。江戸に稲荷の多かつたことは周知の事実である。与力邸内の社には、稲荷ばかりではなく、ほかの神も合祀してあった。私の家のは三座、正座が稲荷大明神、左火守大明神、右道了大権現だった。社は堅固な土蔵で、文庫蔵や納戸蔵なんぞとちがって二階階ではない。七尺六寸四方の

黒つや塗の土蔵、みか高い宮形。内部の神前には二重の扉あり、五段の階段あり、神鏡を立て中真に神体を安置する町重な箱あり、又中の箱は桐の文箱形、よもぎ絹紐で結んである。

上には御簾をかけ、左右には玉と鍵をくわえた雌雄の狐、並に矢大臣束帯の木像を据え、木具はことごとく檜、金具は真鍮、内部は金渡、総て神々しく厳かに裝飾されたものであった。

幣を神前の中真に立つ。供米を捧ぐる白木製三方台。飯こわめしを盛る器。稲荷へは別に油揚げを盛る器。たかつき。神を立てる花器および大きな獅子頭雌雄二個を飾り、内部外部とも藁注連を張る。

祭典の日 初午とは、二月に入り千支の初めての午の日を初午、第二を二の午、第三を三の午といい、家々の恒例により、初午の家あり二の午の家あり、三の午の家があった。

祭典の式 組屋敷惣鎮守の稲荷、里俗代官屋敷と呼んだ町、私の屋敷の並びにあった明徳稲荷の神主菅北筑前という人の受持ちで執行した。平常は朔日十五日を月祭といって、小祭典を行なう。神主は烏帽子直垂の装束にて式を司り、神を捧げ御米を供へ、指にはめた鈴輪を鳴らし祝詞をあぐ。お下りの供米神酒料は神主の収入である。特

に、初午の祭典には、禰宜二人附添いて祭事を町寧に執行する。

幟 一つの杵へ三本づつ立てた二箇の杵を拝殿の脇へ立てる。一は正一位明徳稲荷大明神、一は火守大明神、一は道了大権現と、白い帆布綿へ知名の書家が墨黒々と書いたものであった。

郷土室より

江戸復原図が二種刊行され、当室にも寄贈されました。ご利用下さい。

○江戸復原図

東京都教育庁社会教育部文化課編集・発行 平成元年3月31日
30ページ 40×60cm ニツ折箱入

本書は都市計画図(1/5000)の中に幕末(文久2)の江戸の町割を復原し、更に武家地・寺社地・町地等の情報を盛り込んだ復原図で、文化課学芸員亀田駿一氏が編集したものである。

『帝都復興区画整理誌』による関東大震災直前の敷地割の復原→『大日本改正東京全図』による明治時代初期の復原→『御府内沿革図書』による幕末の復原という段階的作業を経て作成された。

○江戸之下町復元図 時代・嘉永 縮尺・1/2500

中村静夫編 国立歴史民俗博物館発行 平成元年四月
二枚(北部・南部) 88×125cm
付・対照用現在図(昭63)

本図は下町一ほぼ神田、日本橋、京橋を中心とした地域を詳細な大縮尺で編集したものである。

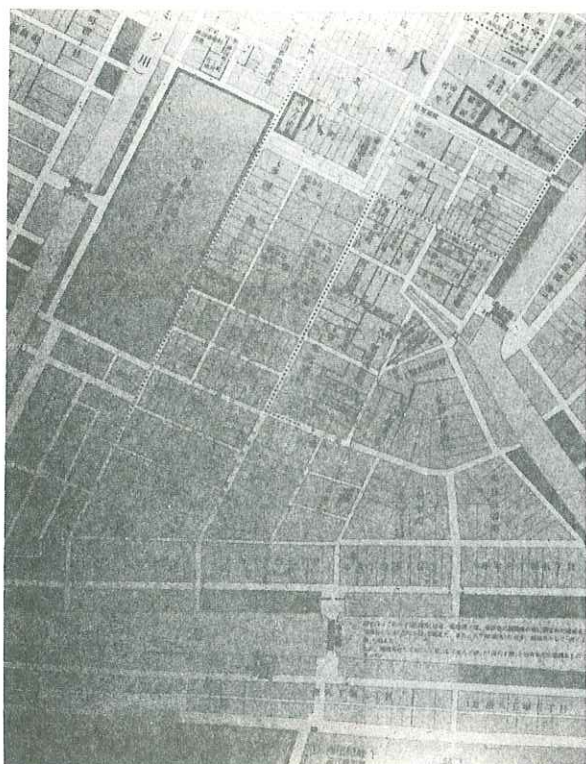
地図約一〇〇種、文書五〇種以上を駆使して、1基本図制作(地図の骨格となる水系、道路などの縮尺の正確な図化)2基本図上の編集作業(基本図

上に人文現象を肉付けとして記入)を経て制作された。

五〇〇石以上の旗本には石高記入、各町にその支配名主を略号で付す、名主宅には年間役料、富商は上納額を記すなど興味深い。

また編者の方針で、時代は元禄だが呉服橋内の吉良上野介屋敷、鉄炮洲の浅野内匠頭屋敷をも記入し、南北町奉行御役屋敷内の御白洲の位置を図示したなどの特徴がある。

(別冊の「同図編集経過報告」に、地名、人名、寺社索引付)



明治時代 店名 人名 検索可能資料 その 3

【明治30年代】

京橋図書館蔵

【明治30年代】

(明治30年)

東京新繁昌記(抄) 金子佐平編 [KB05-ト]
職業別に主な店を解説

(明治30年)

基督教名鑑(抄) [K19-キ]
教会・学校・団体・慈善協会・雑誌社及書店

(明治31年)

実業人傑伝 第1～5巻 広田三郎編
[K284-シ]
全国の実業家、地主等の伝記 (付録) 出身地別
収録者一覧

(明治31年)

明治期日本全国資産家地主資料集成 全5巻
渋谷隆一編 [K283-メ1-5]
1～3: 日本全国商工人名録1～3 (町ごとに営業
別に税額を示す)
4 : 大日本持丸鏡
5 : 役員録

(明治31年)

日本商工営業録(抄) 井出徳太郎編
[K212-ニ]
町名別に営業税納税者名(会社・銀行名)を掲載

(明治32年)

日本商工営業録(抄) 第二版 井出徳太郎編
[K212-ニ-2]

(明治33年)

新選東京名所図会 第25～28編 (日本橋区之部)
[K2121-B2]

風俗画報臨時増刊

復刻版で、東京名所図会 日本橋区の部
[K05-15-4]

(明治34年)

日本商工営業録(抄) 第三版 井出徳太郎編
[K212-ニ-3]

(明治34年)

東京名物志 松本順吉編 [K07-ト]

(明治34年)

東京北盛組組員商品録 三橋喜久造編
[K2121-ト]

日本橋地区の商店名簿

(明治37年)

東京明覧 [KB05-28]
各種商店、会社他、業種別全般

(明治38年, 39年)

二十世紀の東京 第二編 日本橋 第三編 京橋
出版協会編輯局 [K212-ニ-2, 3]

町なみ紹介、(付)職業別店名・氏名